

次世代人文学開発センター

◇教員◇

先端構想部門

教授：小島毅、向井留実子

特任教授：柴田元幸（集英社高度教養寄付講座）、古井戸秀夫（同）

特任准教授：河村英和（同）

特任助教：國木田大（後期教養教育科目担当）

創成部門

教授：下田正弘、アルバート・チャールズ・ミュラー、長島弘明（兼務）、武川正吾（兼務）、中村雄祐（兼務）

准教授：高橋典幸（兼務）、高岸輝（兼務）、小林正人（兼務）

萌芽部門

教授：松村一登

（１）次世代人文学開発センターについて

本センターの前身は昭和 41 年度に創設された「文化交流研究施設」で、地域間の文化の交流や異なった文化領域にわたる関与と展開について総合的な研究を行なうことを目的としていた。その後、昭和 49 年度からは 4 部門・1 資料室に再編され、平成 5 年度に朝鮮文化部門、平成 6 年度に東洋諸民族言語文化部門が増設され、それにともない「基礎理論部門」、「朝鮮文化部門」、「東洋諸民族言語文化部門」の 3 部門からなる研究組織になった。平成 14 年度からは「朝鮮文化部門」が「韓国朝鮮文化専攻」として独立し、平成 14 年 7 月から寄附研究部門「文化環境復元」が新設されるのにともない、「基礎理論」、「東洋諸民族言語文化」、「文化環境復元」の 3 部門による構成に改組された。そして、平成 17 年度から現在の名称となった。現在は「先端構想部門」（旧文化交流研究施設「基礎理論部門」から名称変更）「創成部門」「萌芽部門」によって構成されている。

センターは人文社会系研究科・文学部に所属し、研究を主体とした活動

を行なう。そのためセンターに籍を置く学生はいないが、授業等を通じて教育も担当している。また、平成 27 年度からは集英社高度教養寄付講座が設けられ、高度教養教育を行っている。

(2) 次世代人文学開発センターの特色

センターは、大学組織の上では研究科と研究所の中間的な存在と位置づけられている。すなわち、東洋文化研究所など、学内の独立した附属研究所と異なり、センターは人文社会系研究科・文学部に所属しつつ、研究を主体とした活動を行うものと規定されている。

「先端構想部門」：

当部門は、旧文化交流研究施設「基礎理論部門」の活動理念を発展的に受け継ぎ、複数の専門領域にわたる研究、複数の地域文化を対象にする研究、諸地域間の文化交流の研究など、特に領域横断的で国際的な研究を行ないつつ、それらを公開發信していくことを目的とする。このため、専攻を異にする様々な分野の教授、准教授たちが着任し、それぞれの専門学問領域に基礎を置きながら、多分野・複数文化に関わる研究を行ってきた。

教育面では「文化交流特殊講義」と「文化交流演習」を開講しており、その内容に専修課程の必修科目に認定されていたりするので、文学部便覧の各専修課程の「授業科目および認定科目一覧」や文学部の「授業科目一覧・授業時間割」次世代人文学開発センターの項を参照してほしい。

「創成部門」：

当部門は人文社会学のなかで新たに形成されつつある学問領域を育成する目的で創設され、当初は「死生学」研究の拠点として発足した。このプロジェクトは所期の目的を達成し、平成24年度に本センターから独立して死生学・応用倫理センターとなった。現在の人文情報学拠点は、萌芽部門に置かれていた次世代人文学データベース拠点を拡大発展させる形で、平成 25 年度から本部門に移って新規に発足した。人文情報学拠点は、人文社会学の基盤となる知識の保存・発信の方法がデジタル媒体へと大規模に転換され、進化する情報技術の影響に曝されるなか、人文社会学が培ってきた伝統的な研究方法と研究成果とを将来にわたって活かす、あらたな研究モデルの構築を人文情報学（Digital Humanities）として目指して

いる。

「萌芽部門」：

平成 17 年度に開設された新しい研究部門で、平成 18 年 4 月より実質的な活動を開始し、新しい演劇学・舞踊学の構築をめざして演劇学・舞踊学という新しい研究分野をどのように構想するかを課題とした。

また、平成 20 年 4 月より、萌芽部門に次世代人文学データベース拠点が設置され、「大正新脩大蔵経次世代データベース」と「言語資料データベース」とを柱としながら、あらたな人文学の基盤形成と研究方法の本格的模索が始まった。前者は「大正新脩大蔵経次世代データベース」を基礎としながら、仏教研究遂行に必要な発展的研究情報アーカイブを構築し、あらたな学術空間の創出を図るもので、平成 25 年度から人文情報学拠点へと拡大発展し、創成部門のほうに移行している。後者は、大量に電子化した言語資料（テキスト、録音資料等）を基礎データとし、新しい人文学の研究手法（言語資料学、電子文献学）の確立を目指す。電子化された言語資料の乏しい、ロシア・旧ソ連、およびその隣接地域の少数言語（ウラル諸語、モンゴル諸語など）の言語資料の獲得とその電子化に重点を置きつつ、やがて日本語の大規模コーパスが利用可能な環境を整えてゆく。

また、以前は現代インド研究拠点、イスラーム地域研究拠点が人間文化研究機構の共同研究拠点として設置され、他大学の第一線の研究者を交えながら、国内の他大学・研究機関と協力しながら活動を行っていた。

「集英社高度教養寄付講座」：

株式会社集英社からの寄付によって、平成27年 4 月 1 日に設置された。本郷キャンパスおよび柏フューチャーセンターにおいて、学部後期課程と大学院生を対象とした後期教養および高度教育授業を展開し、分野を超えた「教養としての人文学」の新しい形のあり方を研究している。また、チームごとに 1 回程度の公開講演会を開催している。

(3) 教員について

「先端構想部門」：

平成 29 年度の本部門の教員は、小島毅教授、向井留実子教授である。複数分野や多地域にまたがる研究を設立の趣旨とした本部門にはこれま

で専攻を異にする様々な分野の教員たちが着任してきた。旧文化交流研究施設創設時の吉田精一教授を初代に、美術史学の秋山光和教授、チベット語・チベット史の山口瑞鳳教授、美術史・考古学の青柳正規教授、西洋史の高山博助教授（西洋史学専修課程に異動）、美術史の小佐野重利教授を歴代主任として、現在の教員構成に至る。小島教授は思想史を専門とし、向井教授は国際交流室担当で外国人留学生への日本語教育を行っている。

「創成部門」：

平成 25 年度に新設された人文情報学拠点、下田正弘教授を拠点長とし、アルバート・チャールズ・ミュラー教授のほか、兼務として長島弘明教授（国文学）、武川正吾教授（社会学）、中村雄祐教授（文化資源学）高橋典幸准教授（日本史学）、高岸輝准教授（美術史）、小林正人准教授（言語学）が所属している。

「萌芽部門」：

言語学を研究している松村一登教授が所属し、上記課題を遂行している。

（4）授業について

「先端構想部門」：

小島毅教授による「文化交流特殊講義」（A1+A2）、「文化交流演習」（S1+S2 および A1+A2）が儒教の歴史を中心に東アジアにおける文化交流を扱うほか、「文化交流特殊講義」として平成29年度は四日市康博講師の「海域アジア世界とユーラシアの交流史」（S1+S2）と伊藤拓真講師の「フィレンツェのルネサンス絵画とイタリア内外の美術の交流」（7月31日～8月4日の集中講義）を開講し、ユーラシア全般にわたる文化交流について専修課程を超える教育を担当している。

「創成部門」：

人文情報学拠点が開講する科目は「人文情報学概論」「人文情報学特殊講義」で、文学部の各専攻の壁を超え、デジタルという地平から人文社会学全体の課題を俯瞰できる授業を提供している。「人文情報学概論(1)」は全学大学院に向けて発信されるデジタルヒューマニティーズ教育プログ

ラムの中心科目でもあり、文・理の壁を超えて学生・院生が集い、あらたな人文社会学知の形態を考察する貴重な場となっている。下田正弘教授らによる「人文情報学概論(1)」（S1+S2）・「人文情報学概論(2)」（A1+A2）、「人文情報学特殊講義」としてチャールズ・ミュラー教授による「Analyzing and Organizing Humanities Research with XML」（S1+S2）・「Publishing XML Data with XSLT」（A1+A2）、高橋典幸准教授らによる「人文情報学の諸相（A1）」、永崎研宣講師による「文化資源デジタルアーカイブ特論」（A2）を開講し、今後の人文学に必須の教育を担当している。

「集英社高度教養寄付講座」：

平成 29 年度は柴田元幸特任教授による「英語の小説を訳す / 読む」（A1+A2）・「英米短編小説を読む」（A1+A2）、古井戸秀夫特任教授による「歌舞伎への招待」（S1+S2）・「日本の演劇と舞踊」（A1+A2）、河村英和特任准教授による「ヨーロッパ自然・風景史論」（S1+S2）・「ヨーロッパ都市・建築史論」（A1+A2）、高橋和久本部特任教授による「英国探偵小説をめぐる批評言説」（S1+S2）、村井章介講師による「古琉球から世界史へ」（S1+S2）、諸川春樹講師による「教養としての西洋美術の主題」（A1+A2）を開講して、文学部生のみならず他学部生にも開放するかたちで教養教育を担当している。